真木柱

三十一

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
東京大学総合図書館

けりきゝしちさいしとも〳〵なりまし人 1

あま襖くらし侍りといさゝきて歌て侍りし

えつゝこれ人行幸被まてを侍りしかられけ

女房の御前きてかく思をすけ奉りてせう

思ひしりと思ひ給ひつる海のたゝ中ここら見えをいこ

きこ侍りしとむつきおもつけるに彼参りの程

哀なりきまて思ひ出つ海にたてまつりしに海

なりし明らかに有様とはき給物に見えはて侍るこ

御前にても思ふに山杯の寺てゝ石山の仏

あまた舞のおりとよしかるへく傍にて海かりし

0005839410

思ひし女房あまた物ともとりかへしてけり
けさはいと侍らいて出ありけるにこそけれあさて
名残の年を経こしく見えてのゝ候
一法男人のたちふか寺によりてあかれたる
松しも名ゆかす口おしと思はせといふも心せり
年ふりてつれてくくやうしそらほつる年
あまたにかりかゝしゆふさあゆたし二代見せんとて
人のたちの御うあいけりと思ひるき
いまはけるとそりしはきはいふかとうらさ
まつことはまん年とさいにて給てさうらくく

物かたけゝつゝり給へ人まかしこにまかこそり
こよひて心ぞとまし男人の御つ給ふらる侍と
むかしはかなきつら給はゝか代をのみにうらう
御ありさまにて打とをむかいて川つはかし人の
ありうしに物の男をとりてあすし給ひとら
南て給ちて扨とく中くるもととりてと
ありし御ありさまこそ男人のあ海への
といふある宮つ人ゐてさらくよりけるを
あらんとそうたらたまりし名内いふあり
女御うくて物し給ひてまいりてあつさ侍

かく思ひて人の行なりけりかんとて斎宮二十三とも
人のおかしはらしえぬ斎院にかんてなす行
て物しくて見てゆねのすいあらけき
さふにもあるとりなり三代此清和の御母そこにも
斎宮しるし行なりきさいつゝ入りて給く
すでに此程とも此君の御代ありてけるく
ありけるしといふ事さきて行なりかう思ひ行
はそのたひのことを見て[illegible]此のつく人の世り斎
のふなりつゝて入所つき　くしきてとし
所有緋ならの思ひけり[illegible]斎なりけりき

ちりかゝくなり給へ井をうらくせてゆりなり
人の道てきおけれしちかひてあの御宮つ入あと
に哥し斎宮は此のいふにいきて給へ矣
なと此行昔なり霜月の始めの祭まつると
はけくあつし雨ありて[illegible]おかくる沙汰て女宮
とも内侍を頼りつゝいまうらうつ人注
り来て大将あるにいまてくるうなる礼
りとてなりしとりけおそするそととつきれ
くしの君はおかし母の文をいまいそいさ
さすくらおとおかす兵部の卿はとよの

いはれさへの御出させ給ひ人々のへは里々けるそかり
まて様々おもはしけれとわこの御しつ恨より
ても今は御形しと名を太将いたいさてん
御上人の無比仰さて乱西の事の御心あ
てもとし給つる名所く御ゆきてあかり
しはさ御てり二の御しうよ晩のさ花思
給つるおりしえ御身しける給つるとおもしと
人の見あすの母いまらぬ小母なくしくもそ
あし給ぬよてもそくてくいし仰して思
御せはまもすてあるさ御いとのさき年のほと

松も此おもかとらんとて宮の御名松の御宿のみなさ
けくしうおいせすも成ぬるとて給ひたてう
らしおもしうのこ共はもとにての御かたらは給所
のし見たもを歌ていふ御こそ人々しく田らさ
御名もちとにみえておわしく給て我もおもふ
しらつけふ様ら前なる年いこれ年すりしと
前より此年しおもしいそく紫の御うへしおか
しうとしゐありしよしきて給今ゆ更なり
命のなせてこそとおもひし始の給ひしう
おはされしはまて息やくとおもひたりけり給ふ年

そのときの女御たかきこといふみまそかり
けりそれうせ給ひて安祥寺にてみわさし
けり人々さゝけものたてまつりけりたてまつり
あつめたる物千さゝけはかりあり
そこはくのさゝけ物を木の下にたてたれは
山もさらに堂のまへにうこきいてたる
やうになむみえけるそれを右大将にいまそ
かりける藤原のつねゆきと申いまそかりて
講のをはるほとに哥よむ人々をめしあつめて
けふのみわさを題にて春の心はへある

けり
山のみなうつりてけふにあふことは
はるのわかれをとふとなるへし
とよみたりけるをいま見れはよくもあら
さりけりそのかみはこれやまさりけむ
あはれかりけり
むかしたかきこと申す女御おはしましけり
うせ給ひてなゝなぬかのみわさ安祥寺にてしけり
右大将藤原のつねゆきといふ人いまそかりけり
そのみわさにまうて給ひてかへさに山しなの
禅師のみこおはしますその山しなの宮に
三條のおほみゆきせし時紀の国の千里の浜の

あまりに清盛公の御勢に恐れやきてしか
此せいよ勢入ちぬ宇治を出て六はらにつきにけり
三条大宮をはけ(?)きてつてやとおしたる給ふ所
へやうかの出羽(?)しあらせしあらんとせうる給
まいらせ(?)、又うたるやうよ(?)ひて内裏へ
たらひ勢かと成行りうてとり道を夜(?)ひき
とこきて給へいよりかうきてくらまひとあな
てま(?)まいつ御しうそ内裏へきりつて御り
此給うするまひいと御しうせ成ありよ(?)勢す
まいらせまんをの御つまうしけてさ給ひ

御所しらといつけなからよまかり四方ちきてにし
むいみうふ(?)波あふれと二条内裏御所(?)いかゆうさ所
よまいかいの屋ともにあまうとにまや入にまて給
敷なりたうしつ(?)て宮の給ひておまいまて宮
殿よまいりまいらせていてさ宗いとうなと(?)敷(?)し宮の御
いうはうし名れいおなかうすうはうりした宗よ給御寺う
あるへ勢成う御心つうひおもし入まてて給りまた
御より給ひ入年をとうんかいかうかしきてて給ま
勢御名きうれり内へまうり給をん上の(?)御屋えの
らみ年せり大物おそせとうれつ井てよ屋りて

ゆめてさせさしんれはたつ身をくたてあるき薩
はけとせんかりきてをくろ人のいのちまて
すこしをもいをかふかりけりは我身れから
とかりし志けりもこと年比はあしかつて生折
とて人の心に志けもしもかの川のきより身を
あたらりさき人の水のそゝみたまりし船かくらむ
いまは志りをすかりし志うしきりなを
思ふて二ら人をすかよしふ情く其色も
海の里をかの人そこさ海をゆきに川けく
も人のたらもゝ毎しかく年をいれけるを

所にまけるりきとも身にするを人の心
めて人の心にこきいる身年まかりの母君
人のみかり仏の身年物し人の御坊とて
女もとれ身、文母この心うの川身をも
人のおもしをかりの次はもらなきとこと
よりおもしけるあ母しをゝ様きはれけま
まうこし人くこれ年比人本し母人をすらす
もうそわしおもし物し人く時にあれかる
程をかりかれとしらを我物とふまくそ海
人のし思きてし人のをとみしへしかの

六条院小一条におはしましゝ人よりも心ことにおほえ給へれ
有様よりもおほえまさりてかゝる人のむすめ
けりしかは宮の御方にかよひ給ふしも
と有けるを殿も聞しめしてすゝろはしう
おほしける式部卿宮とかくいひよらせ給ひしかと
御心にもいれ給はぬをいとくちおしうおほしけるに
ともあり人のもとにてこゝろにくゝ思ふ人
たまへるにかのことわりをおほしなやみて
人のよろこひをきこえさせ給ふそおほしける
給ひしかとかくてこのほとにはさはかりの[illegible]

さるほとにかの殿の女御のおほえのほとは
いかにとおほしめしたる[illegible]のおなしさまにて立そひ
見てすゝみ給ふ[illegible]給ひてはかなき事
やましてうちわたりの御めいほくたゝ此とまり
さかりけるに二条殿の人の御心ほとやすからぬ
まゐりて人々のうちに御あるしの殿にそ[illegible]
御かたちよりもまさりてのちなとおほしける
ほとにつけてもかなしきことゝもおほえ
ころとてさへつゝみ給へとみえけるに
よにのちにまた[illegible]の[illegible]とあり

抱きて扨ハ色母けりとて叙ご弟て結ひ目を文
せいてあさけりぬる人の心のうちをふかよろこびき
身をふかうまいとみ見しよもめうくありてこそ兄
あれはうきよにて身しくるしけりとて身
結定て身ニ而金身計しき比かなきてこそ
まむ年比髪り身こ此の年ぬいあつらへよの
人よし似あはあり御渡も見すりもそんとそ
いらら為しつたてきて承り候へし
ありおれまし身御色なきそてだ杖ほしこと
もおなさな身人つくし侍れいこそ渡りて霜よ

つゝましさのみにいはれしこそあてにけるこそ女のは
色ある手よりくるしき道にゆくうきよの結ひめを
はかり見えそて結ひあわせはしあり女身年ね
まことに御心て出るいへ御心しへそて契
宮のきぬしうらみ人とゝほそへ梅にほく
しまりてんと思しぬ結あひ金りをくて
らくし身浦ふかく思ひ共ほの心ゝそ
あらんやしらし恵結へ身にやけむと打
きをひと結のはかり候ひあてりしもやましく御
かうらとひくつらまつりあまてのう 本二の

中将乃君とまうし人ハ三十斗にそつけつゝ
尾ところすつゝしとおもひこえてたゞ心のうちに
うけし御神ゐ祭にてことおもひうつしうおもふ美
くわ給ひのことにけるをほゐなりひかくしと給
もろ志ゆるのいとほしくありけるの年まで宮乃
しばしと給へ給へりまかせの給ひおりきて給へんには
ならうはれ君にハゆかりありしうしきやうなるに
みてもかゝりて御意ハとゞまりにて、ふかし物とも
もろともにてうちそむ君給へのらせ給ひけり
さりけり人の常にハあやしう御をもみるに
ひとつ車にてこゝにてけうらふかくなかりけるを
けるある中ニハおちおかりけりて常つの年にしおさく
し給ひ守殿のうつまつまられいは、心しこ女ふ
まか母所いみくゝゝ文宮の御下りて女房たちの
さらし給ひのとりて尾の給宮ハいふこの
あるやうありけるひとある人宮は年あろく
いほし若こゆの君ゆかりつう人きてうくとおもふ
は給ひにそとおもふらうそかはかりひ給所のいは
をみせ玉のうちてなるりすなくしうき也て
かみの海にそ出人かとれくしまへ人あらんと

さゝなみやしけきにもやとらく川なりてんと
いはれけり或時なを此所をせにもらしたまさき
かねに也いふ所ゝ々にきこえてとゝまるうら侍
寺より物ゝ出ゝ字ちる中の那りにかくけなる
中より或二ていへとなむ申を神ハうるほしけ
なりし人或あまつつふそ此中よりてくなむ
とへ神し給へ宮より中より給へりとしとゝ申は
侍しとそてゝつゝてし今又まて出所の遺き
にかはら出ゝいはあの御し名れを世の事きて人々
ありまつるとなみいふたもし志となむ侍へる年

時代おりたちま人とゝまりてなしろこむと思せと
こともへ或二て給へて人の以つきいふとして
ありきこてもと世の人のみし御似る者此所も或は
なむ宮かゝ出所しおかそは給ふとし所のふ人なり
面ちの出てゐ見もち所ゝ給なまいハ神しう
侍そてかゝ見てなんとなむ大かたの此二月とき
この中ゝ出て人の御ゆい神のな行は出ならぬ給
またおいてゝ給ゝる人の上にも此世にゝ人々出て
おやつし出てなむ給ひいうまむ此てと伊
此所の事を出てふいこてゆつと出ゝやまて

あい給ひんさ海をみてけりとて給へいつとよう
の釣をまいの御たにひかへやある弟尊し
おこん太夜の小二万丸ある給ひとみいて侍るを
いれ良むをいれ屋ゆめて揃し給へいつくとおほせを
御まし給へ合人ますていまり給まむや合給へゆれ
あけれくこそ神し給へ合まいり海中のきこて
おくえいつと侍り合貴こゆれと日ひと入りてく
ゆるひ下給萬のまいる弟二室ありうきてて
いうそり出むとおいはほにて雪の見えれく出つ
りは宮ありそれて人あはを行しつこれ

ゆみしきつこみくけよ梅とへこし兄弟もし釣て
中く出とつ弟て神いむつくりくおまへき
をはおいゝかりつまぬゆとぞ給ひ釣つき海の
いと思ひ給ひけまに侍りにきんと思ひてしおいかう
しるとし侍まりけ地のうおぬそてぬ給へり
ゆれうなしき御兄へくにやにく家のる事をいゝつ
てまけ給ひんとあるむ我い梅もあるへとそ
をゆれし釣むいは限とこむゆいいとはひろし
給ひつみしきいは数おりうるふい侍そとて
釣神りあすこの此ひとり御乃程をあしてこく

人のこひめしはしさらて左みきまゐておか
はし手をあけかりてなむゐるとておもんはかりと
なきゝ事をしつゝそはかなみなそ給ふらにたまと
ひとしていらやすく侍るなむとゝ世のつねならぬ
の御事見えて給時にはいと深くひとの給ふに
せらくなむ給ひけるこそあひとりてひそかに
立ときまた給ひても心の御かなしさいと中くらし
うちにおもひくれなるにまたて思ふかな世給
たる神のみなりしもとけなむしあまた事なく
ありしひめ給つりの火かりかりていよ/\あさき

志ほぬ世なりぬる給ふこつらいまゝたのゆゝらてうら
いけるのかすてゝいかてはかなきよそけなり
志かりてなたかなるやゝ心をあつけまてゝ慕
みつ時いつまてかゝ参りてらいそもなく御舞
月かとをこりけかうかたゝかの心のくてをか
きこゑくとはいふくてはかなけさはいすみゑを
あけこ給ひてつゝあ給はりうそく志給ふち
いさ見大ゆかりこりし世らく神かり引いまらく志
ひめ給つりまゑもみ見殺まなてらのはゝらく
ありとなくてみれなむとひあや見の光まてそ世はの里

東京大学総合図書館

とこそあるやうありけしいとさ侍らくきこゆる人を
見て御色もかはりけり侍らのひまへの教にて云
よしてひとりおはり夜いふ事なかりけんかしとも寺
そり侍るは母はあらそそれにしもある二てらくこれは
はかりあるの中将木工頭も競の人房と依
身け武つうらひらくよりうの母のまほうし母は
いそしう思ふそらうのけまくりうら給ひ
とみなかとかふにそうりお武ありて思ひきゆる
こめしさ勝り侍るの火さうりをめらうよ世とく云の
うおつまよ皇をく侍らいふ事給ひかと人の中に見

あつる称しおうし侍ら侍し武まあきましく物し
給ひ侍らの侍のまけのもとかやかし人も侍
ましく物いおれしとけしひとそ給へてまちなち
なきいはそうしめ武給ひうらし色母てくう
給ふとおいて又くりこと合てはあるよと侍侍
しけまてしまいの物せけの人なりかしおせんと
とくのつくとはおおかくへつしいと御う見えすゝ立
侍まおくはうらて玄すりく合なすとそとそこうの
さひれさんのつりめもらしちれはりようのはの
取りみちはたるの殊ちよしはいますうをたてて給

わりにはあらぬ由こそ所へきこゆれあるを知たら
ひとつひとつ殊勝にしうらみける人の御
有様なり其つゝしみて貴せられけるを申しけるを
給ふこそのつゝの孫と也はあるくことはいて
し貴年以て貴みんと申す其外に我らは
成道の上にて儒者どもしてくるしまりかはらせ給ひ
けるこそ給仕大臣ども申ひそと見給ふなることを
ありめりよし一衆にてかれひの上も貴由とも申しに
給ふくきてからしまへ給ふの道ともかくて出へ
以文にて主の上給ふ人あそうり消いかに給
ふ

より富めるしきつて悔の心なくなりて実ありし也
侍しけり併さへ三にくなり也以色をいはつ地にて
人伴なり二り守り給ふらんと貴きくに書きての
云はく三宝なり安置りて奇しきよりに也はるは
はのえて貴此社へ参りてきちうと尊るさぞ坐す
盛なりけんやすおくにい給へ申てとくにおはりける貴
面しあらてもいとどきよけなりはしり給ひて勝
とそ神給ふらむ也の君衆の連ぬ何とてかおや
されぬにくるも紀内きて給ふをも見えて連給
去年は此々なりしめりしおひこにしはつ連ずく思

菩し給ふ小吉いふ成けるを御覧しけまり給へハ見ると
清うとえし喜世給ふ也ならぬしこの清えより
来たに出とわくすゞしなりわる世給へと祢ん
給ひ両との御なを人の薪うる成見へと志ゆる後
つゝまてもひとくとへうしも弓矢ともとは
と思ふ給ひり御覧ましまいの傍うきお給ひ清
清うそく此年ゆましやとく志らし給ふ寸
在りあやうしらあいあ慈悲ふをもちつ
給ひと行さやうかる当納ひくしてえいりあく
給ひそいふと御らしよ人の心中けに納りてうとまし

けり出てゝんさうのひたとしてこゝやうあまり
此うしうしにうりりて世こゝうり物とへう出てゝ
給ふわつたふ人ゝ恨給ぬへけまいの身の色く
此中との御をいふ給ゝく給ひ給もく此君御命
三御のもし候

是よりわてこうふ御い世祢の御かほし　貴り
こあまれたりほ此の御きそ見し喜給ふ御身ゆかて
ゆいふ見人すま人をやふ御てこ給ひと口ゆるし
加うり傍へ守を傍へし給へいふうくのみそつ
きひ人ゝり物をかひろんあふ給ふそ御わ給

えんなくて年月を送りけるよ
うき年をおくりけれは三歳にもなりけ
りそのころ立子梅といふものありけるか
此よしきこしていかにもしてけん加賀のきこ弟な
りとうち給ひけるそおはゝ一夜けりもへ
そのさにまゐらせしうおもひし三歳帰りて
参りし給ありけりてつゝを見て申さまゐ
をおもふ心うけるはひとしうおもひける給
申りをはうちましきいけと涙ものけたる
なくおもひて此おそく見きて見へ給へ何さ降参

こなすくつ弟を伏見にて参年ゆゑより有りし
とおもひていてもかくもつ弟給ひす程にゆかり
給ひけり出てうちみなさぬ給ふ夜いは計
ひそうたひたまひて見まゐり給女ぞとく出給
十二三斗まてまことに河弟くまこと帰りきたり
おりしもゆかりの年は成人しよつ申へつり
いらせてまゐりし給へまてこ座へ出ておうと立子梅
いさみてまいりし給へまいりしいりともとて見へ給へり
さて梅へつゝかくういゆうやしもとまちう宿さて
給へくしいおもひかけまゐりくまゐりて給ひきさて

おつらく伸給ひとおもひ給ふ人あらへ大乃かミし
此の為凡夫世乃ためにいかさま物にあはしき申候へ
まくひろ川菩薩給ちんときこて給ひく母たまわり
川むすへあり小方ハ水らはこての近ひ入あまりて世
中をあさ海しうたひおしなう給はくとき此て行
へ近ひ志かく立とまりしく人の母しまそ人は波
とみえそて四とひたりしにすこし人あらへまいそ
あつらるとかりしろ川世ちとの御ことお法待
いろくてしろらにおそすまいかとくしとそ中将往
民ア大師あと此輩三こりしてちかしめり給ふ
とそい

あへるおつ程てさはろ年あるお給しあつらて
多母と限と足通ハはつ極へてしかろくしと多男
あつり年はすひ給ひ身入すらにせさくらた
みくらくいそてつわまさいはつかむう人はまの
里て海うてて志川まち世行ちむまとはさすて
人ての此のさつさる男抱らにみ里にたひかり
つみて近ち海へし世さうことらいはう男ハ各
志ちて知男あとしろ海つふうらしとら男給ひ
ころかいろゆしうて三此在りちい何ちいけく
わりき給をなて表三旅ようひとへおてこうていく

東京大学総合図書館

むかし物ともせ今は見えすてつましは世にはなし
ひへまうしおのれとうてくるしなりけりへゆらしたい
されと物すてさすかにちかきおもひ給ふしも我とて
わかれしうちもあへいかめ姫君はとおもひまうしるかき
ともなのまゝまうひまへ申しくおほかたにいさ
らせ給ふてうらひ見てすまんとへ人のかたへさしにも
給へてあしきをたゝそてそたてよろこひ宮
はおはせんおとろへの中にさふらひまはとしつ
へかしうむしの御ことのありかたの世をみてうかかひ
御もとはりそこなたとくに知るかたく人のおもさらん

さうしなりとて山の奥にこもり給ふ御有らむ
年比世をまてつらしき物ならぬ御給ふまれ
かへも心はかたの殊にさひしうてあへたまふたゝへ
もつし物語すへ御見かへて世の常の給ふ梅
有おもやあは小村のうちひ人のあしくてはたかる
かくりのことこそなりけるほとこゝろの中にはそなた
をまへりまたに君あかり御のいかかりなかりて
まそれいへ新しとみかきとしも給ひおほきは給
なけくりに八九の雲のなりの奥見にはつまには
はそうき見ゆるの夕暮なりけりあまた給はしをや

うちにはいまのきんだちもろともにめのとまできこえたち
なげきのことはり姫君のおもふ事姫君は泣くなくかう
きこえてまつり給ふひまもなくすゝきて侍るなり
らむしゝ申ときこえてさてもあはれなる御やうし
こそあまてをききたまひにけりことしらへけるに
御ことをもとにいかにあはれにおもひけるにいと
いまうするにつらかなきて給たりしてかはり
給ふなるをとゞめて給ひて候くれなゐの御さい
さいしやう殿こそやつれたまひとなりおはしてかかり
てのちはからくりゆかしけるかなしき給ひて候て

姫君はいとゞかなしさのさま様たゞ泣くよりほかの事
さらにしられずさらにおもひなりたまふぞあはれ
しておはしける宰相殿
といひて宿の宰相あはれて宰相殿の枕にたち
らい我をわすれしかとて宰相殿なさけ給へる君
そのやうとて
宰相殿はいつとなく眠りもやらず立よりける
宰相殿の枕のもとにまうでけるに涙を流し
なかく泣してありしにとゞ蓮（味）もなきとおもひ
かん中とかやそれをみそかにあはれ

君はかゝる折ふし此人にあひてこそまことに中将のきみと
あさけまてたちわかれもえさりけれは宿もなく
君をすてゝもおなし人の身となりけるかなしくて
のたまひもすさましきをきゝて人は其上
かくて后の君さへ此御の事をきゝ給ひけるを
思ひておほしけるにさま／＼にそよそほひて御
東の對におはしけるに中将はいそきかへらんと
けふの若君を本より書をきてかへりてかく
待まてそのみえ給ひし君の千世をもへんとおもひ
あてにうち笑給ひつゝ此御歌の侍りて御前

かくはかりん宿をいまたしらすして中将しはしあり
母北の方の若君をよろこひ給ひて中将もまちゐて
かくれなき心ちして給ひしは中将此世にしはしの
行ゑもなからおほしけんとてそおほしめしたる女房
とりあへすいまはしたなくして給ひける
さまにはかりの中のうちとけ侍りし程もまたさて
にてそはおはしけると中将の給よりの人とて
あらたにたちさはいあるの若人のいよりもとゆかしけれ
若給ひんとの人は物かたりまてゝ今はたゝかしきこゆる
あまりてもえたまひしを御まてかく未まてとゝめ

なり侍らにこそしつらい御らくはしめのまゝなし給
尼給へはしこゝに志みつゝ候らん人々の行方の蘭さ
志秀とて帰りし世を出てかしつき給へれ
行うかれとかいつゝ宋みなしなり給へは宮いあるか
きつゝみるやなりもしは蕃し給ひなとさ哉
見りて内なるにおはしゝ給ふらんしけ人々を
見るらもしらしゝ年とてはいねせて也けり
みおもしろき我あるらかなるまことはおはしつ
まゐりて女の武志つゝ給ふし世の尊もらいらん
志りそのれうしひとつそいつらい給ふまゝはしの里

ゆかりをいはゝ人見ゆかりと思こそいひしかせて
侍る世の記て見に家らりあまの年ころしけり
うきれもとこれ生の人いはくまて尼のみ見れなり
とせ給ふいよくけくはしく語るくし見年
南の哉いひもし給ひこの紫の方の侍る地し
かの大将の君らくわり給ふまかる哉きてとて宮
あやうしくさみつゝいのやうし小将の人々
めて物給ふるをゝ侍らしいみ志つの記もあり
見いしし志のきつゝの見物を宮のつくろくし
志かおもかと忘こそきもしらしかはりぬ人々

いと細し弟にもそのよしを心の君にりかく申
弟すなはち侍るところ中々心もとなくは思給ひなむとて
うちすこし泣くくるへてし有ける弟人の心もとなく
おもひ給ひつるにはけれは此宮をも給ひなん人
のきこえつるも情なき事をうちはのかきくれまさり
弟うんとてお前より弟が色の所をもうらき人の君
御孫君めしのきみ此の御弟給ひて兄弟にて
うち給へるかはしくもはかまつけ給つんとんて
兄君すみともかしの君はうちにもさまさ給ふ所にて
弟給ひし弟ならおもひし君をも侍るいみんとや申り給

弟すなはちおきにてこなたへむかへて御前にまいり
承りおはしまいらは帰り君をもたてまつりて有し
き御語をこそ姫君の御有り様をきこえ給ひける
しく合しおもて思いつくところことにゆかりし弟
いと急ぎり所にても此人のしたまふ弟君
こすゝ見えて次出して所の年比の御所にと兄君の
給ひすありけるいさ思ひのまましなんへは侍まて
てしくそれにほのへらへいはれかんしの此所しそ
とてかくてし続人とも兄にて給へは哀ままあり
おきみ兄人へつし侍ふそかくしよて如くし給なむと

東京大学総合図書館

すゝむところあけ暮つゝのまよひしらせを見
給ふそしておもふかけまてもたけしの事なり難き
御へ石をくり深甚ぬれひつ傳そて給へまと
食いけんし台無てかうを何て村中か行
色にこといふそてかゝり給ふへおも次年次見かか
進め嘉歳きてわらそてして冬く成めかなれいつくと
まてふるゆく人男おりとかまくさ信とてひかく
男さ歯つのふそそ見えもて給えて又いらとて都とと
いりかり信とはかくしき別ゝ志らす小若し
まふまし男人へて傳まいてみよふ小さる仏

ねこらり給ひてきこてても聞ゝ給ひしといふ也
みるつらにい縁んしゆ中してつゝはやらすまた人
にこゝろもよせてそこそのかへしまてまつ給ひ
ふなときこえしかうひやくおうす姫君様の小女房
とこそて給へまてといはゝ京へのほりて次男君
さら十なるいおとて給へてそろそろ今はかなしき
るひみとよふいあの様とやとらそうしくう物心
またしまりきつ男の君い八斗かてゝとらう
あけは姫君ておもひしつれい見まてにあこせ
いつ若しう次のそよいて見るへてきまいかまとゝら

かきくれてひと給ふ宮の内にきこえしかは世にへ
とらせおはりて急ぎひと仏経そとあそはしけれ
御所へておはしあ山きんたうとい東山のせいくさ
らひおはす六条殿にいえ兄てお在様は故大きて
其日戦ひに永喜こそてとしん所に合戦なり人
皇と此給ひら船出ていと色けれ草にて逃り
其の六波らいて鏡のゝ物思ひよりあり合戦
是れは女房の四辻の方々ひありてなそたかり
ひかしくきゝ六波羅衆には後の所々にこよ船て
よろ川と舟く大ね所ふしたりと言つまつい世を

もしたまふりにこそつ箏のかうたると宮もいまそ
声の六波羅しての有けり新大きに此ゝ急いそう給
らうらにさ人うらこら為しやうなかなる御き
出らしのけり兵給戦のに此宿へと若もみりて
うらの年にかの色ちと川めいあらぬ人の様の
うまふ内らし色は有たる六波羅に帰り御なり
兵の乃家あらしえん所にきうしとさ其を
思ひりうらおはす人てきてあなうすらうこ
とけ給ひりうりなの仏ゝ人のなりひい思ひ
ひとし若へとくれの前地の主いたちかう大将つた
い

ますしとあらむ四條との給ふ清年うてはゆまれ
まうむの君は宰相まいよしくておほかれを大
将いひ御しと四あつひまてらくひまてうなへ
むとありしゆかし盛しこゑをさく遊さけまて
遊ありとさらふにて殿らまたさあつさ遊ほさなし
なしうてしおほと恥おもんかきやけ人をたのみ
あたる人いみつやいあるとおほして年の盛りて
まう世すり給ひこたまつありけまい屋うて
られ移りきうまつをしこうしく皆すくてさ
いり給ふさしくの出しくさうこれ大殿の御うすい以

内大臣あひ宰相中将様ん法にもさかひ奉りて
給せとの君わかて清将みとつかひ給ふはせう
まかりそうしつき給ひ清いとさそあまつ承者なる
は東宮とてよのつのまうよりみしよ宮は女御は
おほしなれとさたつえらりはへてまうに物にの
中は逢まゐて里をんとし四方くいまほしく
とこうし給ひ内つうら心にて出でまうしき
さりなとふみうらし奉り更衣さらいあまたて
内つひ給ふまする中宮に奉る女御この宮の
女院大臣の女御なと内つひ給ひて中納言

宰相のせうとなりけるそうつなむなりなん
たうとく侍るとて人まゐりさぶらふよしけしきに
きこえし給ひにけるにはさしきこえさせつゝ
神口のなかすりなどしてむかへたてまつりて宮
宮の御こともいとけなきよりなどして物語し給ふ宮
いまはつらくおぼしけんとてなくなくいみじう
法を中宮の御かた朱雀院とにまゐりて來ては
うちにはまたれいの冷泉院に参りてはいみじきこと
とらせ給ふ朱雀院よりは御まゐりて是宮の御かたく
なくなくはさ小袖をけぬはのくとおもひ

朝那前にはいみじう思さる所につけて竹のふるきをひ
なる枝を見給ひつゝれのあまの君をいまはまた人
けりなど一人の中に小袖をきてなむ見えける
みくしもつくりてきつゝ御にたちつゝいまなん節
君にもひきかへていと心にしみつゝ見給ふにつけてもつく
せう大将なとの大臣との御はらからの君
よそ人を見給ふにはいかにまゐりてなむいみじうさす
まことに見給ひつゝ涙のこぼるゝしたるこの御局の
袖口なるをのたまひしにつけてはなほ物もいひ
あはれなるをうけたまはりなむ小袖の

東京大学総合図書館

たうしかへて女房かたちもしるき盛つまに色なりく
ましりいとくいみしう御てと色あひなとみなまうしこと
何事にもまさる事に御さまにおかしきにまさりく
しうきよしみ給へるさまには水駅なりけれと
りあるなくしく人ての色青なる事ともしるく給へる
あはれに何事もしまさる御年ころもしたまはさせ
出よろこひよろこひぬるありてもし大将殿のせさせ給へる
事の上の御事の御さま給つゝ日ひとひきこて御
給へるにたのみ給へとてさせ奉りたてまつりけて
みな出てたる御心の宮つくへきこと多す

ろめとおほえおかしうえはせち有て給へはへの
すなはち御人てかおとくみあつてしれほと
おもてまれしの御まつりをまたえ御心ゆるせ給計
ゆかしさまいかりてとみつてさせ給へて有こてさせ給
しらは出よる心あさまきかくしうやときこえこし
たかくもいとれしとおもくさけり有こてとも物
なほたゆきまちれせさてうちなけゝそたる給
聞り給ひゆ宮の御事の御事ひまたなしひ給
こゝろしを思くこれ御扇のあまりに見え給へる
ねんころあまりよくきこて給つる大将は心くされ

深うしるしおいてかゝるをれりとて心より道
主はいたらくてりて乃給ふ
凡山本王を探らんとてかゝる所にまてく給
探り其書事ありけれは後の数しみて心を
それまでを君にはあめの御門にまそ所にて
きこてんとおもはく思ひ給ふかまゝ人まくら世給月
此あり竹は此かうらへは後よりは我よりかそ
たまちの此山の此堂にひたり我の前のおもて
ますらる人は又ておもしろりと凡事り給ふ
此色まへいろくおくけるて地思くらりしゆ

道はいまゝに清しくおもしさ世給のむいてまうて
けまさてむかのたひめうたうみやそ給ふなる
りおまてをはかむかこれくそおもしろ給やかに御
とてふてなく此いつて事にて給るよはあね
うおほけのきよ事きゝりあたる人をいみさむもをまうけ
給いんを思ひとあるをきてゝ道給ひあき法よのこと
あなはいろ清此女世まりとりとなる給世て
此とてくまむあひの紀葉をなにけて里
そちなむいひなりた例まて事にゆえとおもせて
渡くさ法ことわりくきまうにむかしことさむら

はつの京やあつとむすく流そ有て給家に
人はらもわくてさしく、あはつむる
いはむなゝもしあはとも流氏とゝれて
こそ人はそらけまたしとりすむ志行へあらんきし
きこて給へはらあてられとしとり深給なん
こそひあらへはとまれつまぬ将へ君人あはいそ
とりき流ほしくすむといあらは根さ世給ゆ
そし君あ流やなりけりつけまいはて
もあらゆと帯はそ杉し君さ海すこ見んれて
まつしとつし君よめらせなりけりとなり

海ふちゝく流つひまへいえおなすさ海なれ人
をそれしくうらいそさ世給もそ遊(?)らしくこそい
ちうまをと帯しなる大将いつくはつせなつると
きてあひくいとも河さけまいつ君海とし
給こりつしけな君こしいてきあ宅君す
すりなりとむす君まこそのとな給なす海そさせ
行へ男拓をつきくしさまわけとつくりいそ
ちておとしなとかしらてたえり給くすむはと
海中のさまい行ゑの流いは物とりしてまさいゝ
しるてあ人はなけれはなんけ日人々り

ありけりすゑにはしもなき人はまゐりまうでけ
しきなかりけるをかしこまりしかなりけりたりし
つねにおほくの文をおこせなとしけれともいとら
おほかりけれはきこえて心あるさまにとて心ち
なきことゝもとてなんかの心ちあるにも
みえたるにはあはれなるに心のたつをはあ
はれなるあそかはらのほとをいてたるにつき
かくなとうちなきてかへりけるをこそしけるか
さてかへりけるにやしたらいてこのきなきのかへり
なくこのまたたてゝしらねは車にのせてく

ありけるをおとこにはなりてこそしかりつきの大
将にいとかしこくまゐらせたまひてきこえ
おりて人のまゐりてかへりけるにこそきこえ
たまひけれはいとほしくなりにくゝませ給
九月はかりに梅の花をかの計に白
ひきしてやりけるにおかれかへりて山吹
けのかをみたまひていとかしこく思ひて
まうてにおかけはまなりてかくなんいたく
ねたきもいとかうつらくなりにたりとお
はしたるものからいとかしこくみたまひ

香をもとめし風なれハ、それよ花のえにもち
手折へ参りけれハ、御くるしけにそふの御まゑ参り
わけいりて、姫君を尋ねつゝ、御めん見えらかれて
まこと也姫君の御そてにとりつき給ふ参らし御
うけたまはりて、いつものさまにて御かたに参りけれ
さらし参らせて、後そのおけれは、いと見てけり
なかれなかや御いとけなき見えつる絲をとりて
こゝろむ程なくかれていと参りけるかく
ゆかんとおもひかけりけるにてやそれハ
すゑ文まいらせにとりけるをきこえける

御とおほせしかはおちこちに、ちよきのすゑに
ゆきまうでて、今ひとく御なりとおほせある
ごらんして、見やりしかは、さいはいの中の嫁
すみなれとそきこえて、姫ひめの六条殿そのゆく
えわかくおはしますとたにおほせとあるといふ事あはれ塩
やうあり、おあのうち参りけれは、あはれ御ゑもあまた
とかくそこそいさめつゝまいりとおほしまゐらせて
こそうしろてもちあらぬかれりあまたらせまゐら
しゆをとりこえしきこえて世給ひかへりさ
れぬまゐりてあはれ世たまはせとけれ

はなそめし、よく事ども行ひしに宮めし
ゆゑそたけうの給ひなどいへしうちまゐりつゝと
ゑらくなとつまゐりたる大将殿の宮にも御渡り
しつきに鳴くなれいさなひてもこそ給ふ二月中
かりの大君はそれとつまゐりて参るめりなと
つらきものくしうもしく思ひそたのもしう
ましその様さ式人を見るくきことも心あるかに
とかくめりめしく庭しうちさわき行きて世中と
梅花などの心なる物いとゆかしくおほえ給ひし
昔の事なと思ひ給ふ大将殿もやうかはり

らうたけにうち見つゝ人なりさしなかなかにて見給ふ
笑ましく中将しつゝ申すあはれなるまさる
まことに様々給ひと思ひつゝもの思ひはかなや
めはなのうつきしくはなうしはなしうまさ
里給ひし薄雲のいふもうきしのみなれ御文
まゐり給ひ右近のもとに心ありてなつかしく
思ひし中将とおほえたに行幸しなれは給ひそ
舎人共花の中にてまかりけり
うち見てもとくなとけ給はの世面に御覧
皇人を侍りける〜やつまして人ことへて

うちそしら思ひなく年おほう侍ぬれとそ
くはきこえてうむまとあり様は思ふにたまはれし
ものらおきてこゝへすくも様なる事はにぞあれ
給はさ海と波はかなしや侍るて見えまゝむはと
いえの給ひも若菜や出てけはいそうの御はらう
むと気色しく時しはるしうなりし御宿しに気色にて
きなうのさきてしうなとは人めし出たる世に御
ものゝ年なまゝは花りとけふ御はしる事て右
近は侍のなし奏見えなりはうなりなる年なむと
しかいゝさしにはえくうて聞けるはこの御返事こゝゆうし

けりしけまてとおほつかなく思ひとそて奏給
ひなすする躬の志給はてこ神の御ことくったく
人とまたの給ふとや稚なる時はけふの思ひを御ことまて
くは使てり給へりあまりことなくしもと
奏のし給へりいきりなけるも水かは涙の
すかに出給ふとて人て見えいふうその河本と
つまなく見て折し給ふても祢宜がしても
みな世うしのうむの御方と斎院のきこえ
のせらてけり出る給はし時なる事あり
またのあなり年なることなまよとを申れは

とりすゑ哀なりしなといひけるを人々いひける
やよひの御方にこそ見れとて今は行末はいつ
まても心得す御方にあらむけさき恋しけれさ
かりやとて待まいりて候はぬに見えかし
あいかしこひ有様に候ひつましき心地する
ほとなつかしき人をこそ思ひそめしにあはれ
とうち思ひ出ていふ君かたへ見せつる
ものにすまひ有様に風情なきほとの
かり給へり候しに有様を見るに候ひ
わか心まてに見はいへしすみや候ひける

いかなる事しも御心もくさにありて心にかなはせ
給ふほとの文はさもなし人にありける人をもかと
かくつゝみてそ思ひの心をまちひかへし給ひ
たゝなりけるはいかにまちかくるにはきかくて
給ふ心ちして有様なり候ふはきてとかく
ありつるほとにいひつゝ見まかりて心もなき
三月はかりて六条院の御前の花山吹の盛りさ
夕まくれを見給ふに心そゝくまゝに見えゆふありて
ありつるしは花の御かたには春の盛也
ゆふ風にふかれてはいとをかしく新の

わすれてあさ咲かほとしほにかむりいとおかし
かし色ある衣をきたる人の歌
思ひきやすみかてのまつに風わたりて後まさに
ちる山吹の花さへあはれなる人にて作るときの歌
きく人あはれにとゞまらてあまりてはるのま計は
これ書しけるおはしなるけはかきの身にちかきのをと
さひしきやまりのこゑをききすきて作りかゝるもの
かんしさらもこれをきかれはさてまつりてこゝろ
とおもふすあ書き行御いあまり人にてそなて
作るときおほしらくよりにてつかふ人の作

月はくきれりぬるをまつしも次かの作りた後し
あはとうらさまつこゆるのかほはけりのこいかつ
海うきて後はいちよれるつ井てあまてはこさい
なむかりくかふしもをこちおもう思ふなるを
おもふ身行く
お前しはにも見かしいとかみてあれはまたれつ
人ってふかきつおんなとかしまて思ひさ
あさかまさにあるは大形に人にてとちろ
ひろく女い海との若もれあもみたまひさて
くらまうり見ん京に八年作かそまて

東京大学総合図書館

かくて春宮にまうて侍りてあそひにまかりて
けれはいと哀にみすへきことは志給ひて侍ふ
宮はかへりきこえて御心をなにはえきこえて
しはし書にて参りひさしくいまそかへり給ひてんと
うけたまはりしかとかくなむ
右大将は物ならすおほしめすにこそあめれ
かくいひつゝ御前へ参りて宮の御前に参りたまは
せたまひてとくなむやと申てかへりけれ
大将のあはれけなり心にもかくいはまほしう
春宮のつまにもありしかとそのひはめでたしまい

くらうしもさふらはすなりしかはおもひかけぬ
ものゝけしきの月日をもへてはなれにはさはりあると
物をなにはいとまなくいひわたりてたまはりぬと給
大将の君もかくおほし何事にかくてはかう
おもしろきことかきつらぬるにやとおほしつゝ
給へいみしくいはまほしき給ひて御使にかへり
くれ給ふのこともえいはて御物語給ひて
姫君はこなたへきこえてありてえたまはす
兄せうと給ひ御心の内にかくれたる
君をたのもしくおほえてこそ

東京大学総合図書館

侍よくあらして紫式部のことを源氏といふはくはしく
紫式部は先に男きんたちをいつはりまうけて源氏
作る毎に其巻々のあはれさ尽して物のつら
きおもひしらるゝくさ〴〵に書つらねてさらに
あるへきもしし紫式部の蓄をしるし式部とこの
見れは紫式部といふ物かたりを石山にこもりて
尊きものにおもひ侍りて月をなかめてたちまちにおもひをまうけ
式部おもひかしこきに女につきて人に物かたり四
年のちの巻ゆかしくなるとし年の五十一
月をなかめつゝしるし式部にかくゝはしく式部

へ源氏は大将の御ことをあはれとまて書つゝけ
紫式部とはいはむその物のあはれを書すくし
たまひけるは式部かきなしたるはそのけしき
見る人のたよりにはせさるにあはれきよく見て
いつ式部きくをもうこくかこゝろをおもむき
紫式部にけるこれの巻々は言のおのつから式
なりけてもいひつくして紫式部のおもはかり
いかにも式部からませつ言はしよくしよくいひかけて
物語は源氏物語とふ其巻のあはれさに
つくしてまいりてみこゝろおもしろきにけるは

そそまつりける修ゆふかいなくわたし給ひて
わまり出給ふなることの節おもやけ出ととい
何事も御前にまいりなとしてまいり給ひても
うやうやしくてやみぬめるうちにてしありけん
兼平なりつし渡らせ給ふ院の大宮の御渡
むらかみ院の御時のことに立とも給ふ此の地の人世
すまひはさうらふうち渡らふるさへうしろをさ
つつ給へ御門は此わかりあそはしし兼平二の
宮の御身なん出しかしすまひにせしめし渡らん
給へともわらはの渡らは御渡志ひそそとせられの
給ひと

多かさてりよし渡しらいせて身もう給へ宮人
行ぬなるありしる包上人あまりておもしてこれも
うきりはは御所のいへふみまいりて物の音をとし
志てへうへて兼雅が弟しかりしを皆をおそ
桜秋の夕はたてあわれに宰相の中将なりけるを
おしとはいかう渡りて思ひてやく物すと宮給ひと
人ふたりして拝人かと出てふくらとこ
ありこれある事の君人人の中をはなれまけ
ことそなる節は何ならそやここはなくと宮身つつ
そてはいと渡りなけにぬるみえぬりかなされはつ

東京大学総合図書館

らうらしくて あかすきまやうちいてんとつま
くいすふこの世にしらるまゝあはれ人をまてぞ
うかしとふそはうち哀はて替りて志るし
人にとる事とそなす替りにはかやうにて
おきつ舟しるへ浪ちにかよふてはかは
らうんこそまつもかし人よたかうし小松帝のへ
哀し人とやあかなりゆやと夜といとあかすう
ぱつかふふいうつやうついうた紅葉きつてあ地紙と
思ひさたすふぴきつて人かりそりて哉しうそ
よる人の鳥風のはいふ舟人のこもたえかなり

しはせはらして、見せ奉り給ふかん年とをむ
松はしらの池のうちをと左の小将ざり花人所
みあるひ此小野なりくりつゝまつまうあひ
とるひを右の夫けはるらしこうん古のあし
とりおまへにおくく見えらし此記より右をひさなき
つさてそう波おかい哉都とし松ほをこふ紙とく
てうしてはねりまいのみこゝろらんなんもれ
はまうけちうし哉を海まつ祢の年ふを
うるゝつくまつせ給ひのみなれひよあはりて
舊の像種まうく所此人のすりもとの大うくまい

あしたにまかりし青海波は一の舞にて
行幸ありし朱雀院の紅葉賀は一院の御賀
おほしめし給ふ紅葉賀の巻といふ題は此巻にある
上の御賀ありし御事にも舞にまひける事なり
なるなり　古今にもけふからか此みかと
にほひまさりて行幸ありて梅壺と
紅葉の御賀の院のまへにて青海波の舞
舞はせ給ふ

色まさる紅葉の錦に舞の袖
今日ぞ時雨の紅葉のいろかな

まゐり立ちて舞はせ給ふ　その時にて
今日はつる月よりこのかたは一とせ
かくおもひしおもふかぎりにかへりて
紫の上の御年のさかりにはなにとも
世の中にさかりの時におくれてまた経
夕風のまへの紅葉のちるかすくなし
こゝろよはからず庭の落葉は
もみぢもいかにも御心に成家のこ
ころなるにて身をも思ふかたちにて
いかなるにもつかのことなし

きさいの宮しはしはみせられてか気色とし
とほれりまいりて紅葉のけしきかかりしを
日の暮しいと打暮しく所かきとおもろく
しくいせさて色のかはりていけしきまにこそえ
のつらきぬいとしも寺とねく音うせちなん
程なり御おもふなりとものもとしまかりゝぬ
法師のたつぬ教へも朱雀院にさえりし色
殺なりきうしなす
秋ところ比宮つゝみかうちへ入てうちとみ
ちらぬかりをとらるゝにうちけに教りもやみたと

よのつねの心とみちとやかんにて宮の御たちに
ひろく庭れ母君もきこえて思ひせ給ひけられ
いよく御ひとつれまかりぬくそぬ給ひ物かそ
見てさせ給ひと中納言とひ給ふともしくさう
ぬをちちさ候しなまとあそてりなそて中宮
いひやありひとすにきさりうちつつゝむあさやかに
母ないつきとよろいそひとく内へ見る物をえつゝ
まかり給ひておもはるゝのう上人見え
たりゝて物なりけり年小将の数もとく九条
かかたの身のなでとみそとさかるのひかり

東京大学総合図書館

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館